

読者たちのディスタンクション？[®]

——2010年練馬調査データからの
テイスト理論の再検討

岡澤 康 浩 (ケンブリッジ大学歴史学部博士課程)
團 康 晃 (東京大学大学院学際情報学府博士課程)

1. 小説におけるテイストの貧しさ

2015年4月7日のNew York Timesは「読むのが恥ずかしい本はありますか？ (Is There Anything One Should Feel Ashamed of Reading?)」というテーマで2つのコラムを掲載した。そこでチャールズ・マグラスは恥ずべき読書と誇るべき読書という2種類の読書経験について語っている。かれは恥ずべき読書経験として『フィフティ・シェイズ・オブ・グレイ』を読んだことをあげ、自分が何を読んでいるのかを隠すために電子書籍リーダーを使ったことを告白している。これと対になる経験としてあげられるのが、大学生の時に自分が読んだ本を見せびらかしていたことである。ある種の女性の気を引くために、当時の彼の部屋にはイヨネスコ、ベケット、ジュネたちの魅惑的な本が目につくように配置されていたのだった。

なぜ、自分の読む本を恥じるなどということが起こりうるのだろうか。なにひとつ恥じることなくひとはただ自分の好きなものを読めばいいのだ、もう一人の寄稿者であるジェイムズ・パーカーはこう主張する。だが、同時にパーカーはひとが自らの読書を恥じるが起こりうることも認めている。たとえば、ドナ・タートのピューリッツァー賞フィクション部門受賞作『ゴールドフィンチ』を読む人を前にして、『スター・トレック』のノベライズを愛読する人は自らの「テ

イストの貧しさ (crummy taste) を恥じるかもしれない、と。

ここで「テイストの貧しさ」と呼ばれているものがたんなる個人の好き嫌いとは異なることに注意が必要である。パーカーがあげた例において、ひとは『スター・トレック』のノベライズを好きでありながら、まさにそれを好きであることを恥じている。なぜなら、『ゴールドフィンチ』とは違って『スター・トレック』のノベライズが「低俗」であることをこの人物は知っているからだ。ここには2つの判断が絡まりあっていることに気づくだろう。一方で、私たち個人々人がある本に抱く「好み」があり、もう一方でそうした本が優れていたり、低俗であったりするという「(審美的) 価値判断」がある。そして、低俗な、つまり価値が低いものを好きになってしまうとき、ひとは自らの「テイストの貧しさ」を恥じるのだ。

こうした個人の好みと審美的価値判断という2つの側面をもつ「テイスト taste」という問題を社会学の重要なトピックとして包括的にとりあげたのはピエール・ブルデューである (Bourdieu 1979=1990)。読書史家ロジェ・シャルチエとの対談の中で、ブルデューもマグラスが描いたような恥ずべき読書と誇るべき読書という2種類の読書について言及していた。ほかの文化的活動と違い読書が学校制度の中で直接教えられることを指摘し、読書が褒め称えられるべき正統的な文化の一部になっていることを示唆した後で、ブルデューはまったく別の読書、すなわち「恥ずべき」読書もまた存在すると指摘する。

読書は他人に語られることなく、後ろめたいものとして、こっそりなされる場合があります。言いかえれば、人に話すこともできないものを読んだり、読むに値しないものを読む人間が一方にいるのに対し、もう一方には唯一の正しい読書を行う者、永遠に不滅の書物、古典的で、打ち捨ててはならない書物を繙く読者がいるのです (Bourdieu and Chartier 1985=1992 : 342)。

この発言からは、読書とはブルデューが構想したテイストの社会理論の完璧な代表例にみえる。ブルデューの理解ではテイストとはひとびとの社会的位置を示す重要な分類原理なのだ。だが、高尚さや低俗さなどといった批評家たちがしばしば本に貼り付ける価値は本当に読者たちにとって意味を持っているのだろうか。『フィフティ・シェイズ・オブ・グレイ』を電子書籍リーダーでこそこそと読み、ジャン・ジュネの著作を自慢げに部屋に飾っていたと告白していたマグラスでさ

えコラムの中ではこう述べていた。

しかし本当のところは、われわれのように本について恥ずかしく思ったりする人間は、たぶん気にしすぎなんだろう。ほとんどのひとはそもそも他人が何を読んでいるか気づきもしないし、気にしてもいないのだ (*The New York Times*, April 7, 2015)。

本を読むものたちにとってテイストはどのような意味を持つのか。この問いに答えるために、本稿はブルデューのテイストについての議論を読者研究に接続し、日本における小説の読書においてテイストが占める位置を考察する。

本稿は以下のように構成されている。まず、小説研究において読者が研究対象として登場した背景にはテイストの序列化が前提とされていたことを確認し、次いで現代日本においては小説におけるこうしたテイストの序列化が自明でないことを論じる。そこから文化社会学者である北田暁大の議論を参考に、ブルデューの議論にはテイストが文化活動において常に重要な資源となるという仮定が置かれていることを指摘し、日本の小説読者たちにとってテイストに基づく序列化というものが存在するかは理論的に仮定されていいことではなく経験的に探究される必要があると主張する。これを実際に検討するために、練馬区の若者に対して行ったアンケートデータの分析を行う。分析においては小説を読んでいるということと小説を読むことを趣味とみなすことの間に差異があることに注目し、この差異をもたらす要因について分析することでブルデュー的な序列化されたテイストが読者にとって有意義な概念なのかを検証する。以上の分析を通じて小説を読む際にテイストの良し悪しがいまだに有意義な資源として利用されていることを確認し、最後にこの結果が小説についての読者論的研究においてどのような含意をもつかについて論じる。

2. 小説読者とテイストをめぐる先行研究

ブルデューは文化的活動においてしばしばみられる高級さや低俗さといった感覚の解明を目指してテイストの社会理論を構築した (Bourdieu 1979=1990)。ブルデューの主張は多岐にわたり、またあまりにも広範な領域で影響力をもったこともあって、かれのテイストの社会理論の内実について統一の見解があるとは言い

がたい。本稿は文化消費の場におけるテイストの良し悪しを利用したカテゴリー化という文化社会学の文脈で重要となったブルデューの考察を批判的に継承することを旨とする⁽¹⁾。

冒頭で述べたようにテイストという言葉は少なくとも2つの異なる対象を指しており、かつ日本語で使われる語感と必ずしも一致しないので注意が必要である。テイストの一つ目の意味はある特定の事物やスタイルに対して個人がもつ「好み」のことである。たとえば友人への引っ越し祝いを買いにいったときにこのお皿は友人のテイストに合いそうだ、と語るとき、わたしたちはテイストという言葉でその人の好みを指している。だが、ブルデューの議論はテイストが単なる個人の好み以上のものでありうるということを指摘している。この二つ目の意味でのテイストとはある種の美的センスの優劣や美的趣味の良し悪しをさす。たとえば、わたしが気に入って部屋に飾っている絵画を見た友人がわたしの芸術的センスの貧しさを嘆いたとしよう。そのときこの友人は私がおの絵を好きなことを疑っているわけではない。そうではなく、稚拙で低レベルな絵画を好んでしまうわたしの美的判断能力について貧しいものだという評価を下しているのである。

ある人がもつ好みとその人の美的判断能力は分析的には区別できるものだが、ブルデューの理解によると、わたしたちの実際の活動において両者は強く結びついている。ブルデューが目にしたのは、ひとびとがもつ多様な好み、個々人の美的判断能力の表出として評価の対象とされ、その良し悪しに基づいて序列化されるといった事態であった。ブルデューのテイストの社会理論とは、ひとびとの好みが多様な好みとして処理されず、それについて評価がなされ、そうした評価に基づいてわたしたちが何者であるのかが判断されてしまうというテイストの社会性を解き明かそうとしたのであった。

こうしたテイストによる序列化という現象は小説を対象とした研究においても扱われてきたものであり、後にマスコミュニケーション研究へ展開していった。読者研究の嚆矢をなす Q. D. リービスの『小説と読者』(Leavis 1932) は、リテラシーの拡大によって20世紀イギリス社会が直面した膨大な数の読者たちと、かれらが読むベストセラーに注目した。リービスによれば小説はその芸術的価値に基づいて「高尚 highbrow」なものを最高峰とし「低俗 lowbrow」なものを最下層として階層化されている。だが、もはや従来の文芸批評において扱われてきたような「高尚な」作品を読むものたちは危機的水準にまで落ち込んでしまったマイノリティに過ぎず、圧倒的多数の読者たちは「低俗な」ベストセラーを読むの

である。リービスが「読者」を研究すべき対象として見出したのは、こうした「低俗な」小説とはどのような存在であるかを理解するためであった。つまり、読者研究とは小説を高尚と低俗へと切り分け、テイストの序列性をつくりだす批評家たちの存在と、そうした批評家が相手にしない「低俗な」小説を読む大量の読者たちとの分割を前提として開始されたのであった。

日本においても読者という存在が重要な問題として浮上したのも、こうした「低俗」な小説を好む大衆という問題設定であった。前田愛(1993)の整理によれば、日本の小説研究の文脈で「読者」が浮上したのは1920年代、大正文壇の芸術至上主義的な小説に対して感動を重視する菊池寛らの通俗小説の登場においてであった。戦後行われた社会心理学者の南博、哲学者の鶴見俊輔らによる「思想の科学」グループの大衆小説研究においても、こうしたテイストによる序列化は前提となっている。鶴見(1950)は大衆が好んで読む小説への知識人の軽蔑が広く存在することを認め、その上で知識人と大衆の間に存在する溝を架橋するためには「低俗」とされるが大衆が好んで読んでいる大衆小説というものを理解しなければならぬのだと主張した。こうして「思想の科学」グループによって社会心理学的・マスコミュニケーション研究的な大衆文学研究が広く展開され、この方向性を見田宗介(1963=2012)によるベストセラー研究などへと引き継がれていった。

小説の読者研究を切り開いていった研究にとってテイストによる序列化とは重要な前提であった。だが、こうしたテイストによる序列化の正当性は日本ではその後疑問に付されることになる。高級な小説としての文学が持っていたとされる文化的威信はたびたび挑戦され、「純文学」に対するものとしての「大衆小説」や「中間小説」といった階層性を前提としたような表現は現在ではあまりつかわれなくなった。1978年には文芸批評家の江藤淳が文学がカルチャーからサブカルチャーへと転落したと宣言し(江藤 1989:445)、2000年代半ばには同じく批評家の柄谷行人は文学がかつてもっていた特殊な地位をすでに失って久しく、いまや文学は「ただの娯楽」になったのだと述べた(柄谷 2005:47)。批評家たち自身が文学がもっていたとされる特権性は失われたと認めたのである。

もちろん、近年の日本においても「質が低い」「読むに値しない」と論じられた小説というものは存在する。たとえば、2000年代においてブームとなったライトノベルとケータイ小説はその商業的成功が注目を浴びるとともに、「劣った」小説というラベルと向き合わねばならなかった。両者とも定義については諸説あるが、従来の研究でのおおまかなイメージとしては、ライトノベルとは表紙や挿

絵にアニメ・マンガ風のイラストを配したものをさし(山中 2010:7)、ケータイ小説はケータイサイトに投稿された若い女性の恋愛体験を綴った物語やその書籍化されたものをさす(速水 2008:7-8)。前者はアニメやマンガのような子ども向けの娯楽作品として、後者は小説を書いたことがない素人の書いた稚拙な文章として否定的評価にさらされることがある。だが、ライトノベルやケータイ小説を「劣った」小説とみなす評価や批判に対しては研究者や批評家による疑問視や相対化も行われている。山中智省のライトノベルという領域の成立を歴史的にあとづけた研究は、2000年代前半にはじまったライトノベルブームが、ライトノベルとは小説の世界における「ジャンクフード」であるという否定的評価に疑問を投げかける相対化の契機をはらんでいたことを示している(山中 2010)。ケータイ小説についても売れる商品としての注目と同時にその質の低さへの批判が行われた。ケータイ小説についてのルポルタージュの中で速水健朗(2008)はそうした批判の存在をあげ、ケータイ小説のことを「被差別小説」と呼んだ。ケータイ小説という対象への注目を支えていたのはそれが「劣った」存在であるという前提であったのだが、速水の仕事はこうしたケータイ小説を「劣った」ものとしてとらえるその視線そのものの妥当性に疑問を投げかけたのであった。

序列の存在に疑問が付され、序列が立ち上げられるとすぐに反論が行われる日本の小説の状況を踏まえると、ブルデューのテイストについての議論を単にあてはめることは困難である。ブルデューの問題意識を引き継ぎながら、日本の小説読者たちとテイストの関係について有意義な議論を展開するためにはブルデューの議論を批判的に再検討し、かなり大幅に議論の設定を変更する必要がある。そこで参考になるのが北田(2011)による「過剰に差異化された人間像」というブルデューに対する理論的批判⁽²⁾である。

北田の主張のうち本稿の観点から重要なのは次の点である。北田によればブルデューは文化活動についての基本的なモデルとしてテイストの良さに基づいてひとびとが序列化を行うことを前提としている。実際にブルデューが分析したような絵画鑑賞などにおいてはテイストの良し悪しに基づいてひとびとが互いを序列化するという主張はそれなりにもっともらしく響くため、このような前提には特に問題がないようにみえる。だが、サラ・ソーントンが批判したようにブルデューのテイスト論はポピュラーカルチャーを排除しているので(Thornton 1995:10-14)、ポピュラーカルチャーも視野に入れて研究を行う場合には、ブルデューの前提がそもそも妥当なのかを検討する必要がある。そのことを無視してブルデュー

一の前提を機械的に適用し、あらゆる文化消費にテイストに基づく差異化の実践を読み込もうとする研究者は、「過剰に差異化された人間像」をつくりだしてしまう危険性がある。

ブルデューは差異がひとびとを分割するラインを引くと考えた。だがあらゆる差異がひとびとを分割するわけではない以上、研究において重要なことはどの差異がひとびとの分割にとって意味のある差異なのかを特定することである。その分割がテイストの違いを根拠に行われることもあれば、それとは別の違いによって可能になることもある。そして、どの差異が有意味となるかは分析者が勝手に決定してよい問題ではない。今まで見てきたように日本の小説を対象とする場合、テイストによる分割と序列化が行われるという前提はかならずしも自明ではなかった。読者研究の流れを踏まえながら現代日本における小説を研究する際に重要なのは、ブルデューのテイスト理論に当てはまるような都合のいい読者集団を見つけ出すことではなく、ブルデューが問題にしたようなテイストというものが読者たちにとってどのような意味をもっているのかを経験的に問い直すことである。

3. データ

本稿は日本の小説読者たちにとってテイストによる序列化が存在するのかという問いに答えるためにアンケートデータの分析を行う。データには東京大学大学院学際情報学府北田暁大研究室によって2010年12月に行われた「若者文化とコミュニケーションについてのアンケート」調査(以下、「若者文化調査」と呼称)を用いる。文化にかかわる意識と行動を調べることを主目的として行われたこの調査から、本稿は特に小説についての質問項目を用いる。若者文化調査は2010年12月に練馬区在住の19-22歳の男女を対象とし郵送法により行われた。サンプリングには東京都練馬区住民基本台帳が用いられ、区全体を対象とした系統抽出が行われた。抽出間隔は10とし、抽出開始番号は抽出間隔以内の乱数によって決定された。2010年1月1日時点で21,860人いた該当者から抽出され、余剰分は無作為に削除して2,000名が抽出された。回収率は32.6%でこれから無効回答を除去した有効回答数は647名であった。詳しい調査設計および質問紙は北田編(2013)に記載されている。

4. 趣味自認におけるテイスト仮説

4-1 文化消費と趣味自認の差異

若者文化調査はQ 11で「あなたは小説(ライトノベル, ケータイ小説などのすべてのジャンル(種類)を含む)をどの程度読みますか」と小説一般の読書量を尋ねている。単純集計(北田編 2013: 95)をみると, 小説を「まったく読まない」と答えた回答者は114名と20%を下回り, 80%以上がなんらかの形で小説の読書を行っていることがわかる。

Q 1は回答者の趣味について尋ねている。この質問は20個ある個別趣味から自分にあてはまるものをすべて選ぶ複数回答式になっている。「小説の読書」はその中のひとつとしてあげられており, 本稿ではこの「小説の読書」に○をつけたかどうかを, 小説を趣味として自認しているかどうかをあらわす変数として利用する。小説の読書の趣味自認について単純集計(北田 2013: 70)をしてみると選択者は249名となり, 小説読書の趣味自認率は40%以下になる。つまり, 全体の80%を占める小説を読む者たちの中に限ってみても小説の読書を趣味と答えるのは半数に満たないということである。このことが意味するのは, 小説を読むという文化消費の経験と, それを趣味とみなすという趣味自認との間には乖離が存在するということである。

この結果に基づいて若者文化調査の対象者は3つのグループにわけることができる。第一のグループは小説の読者であり, かつ小説の読書を趣味であると自認しているグループである。第二のグループは小説の読者ではあるが, それを趣味とは自認していないグループである。第三のグループは小説の読者でなく, それゆえそれを趣味とは自認していないグループである。ここで先ほど紹介した小説の一般読書量(Q11)について「1よく読む」から「4ほとんど読まない」と回答したものを「小説の読者」とし, 「5まったく読まない」と回答したものを「小説の非読者」とみなすことにしよう⁽³⁾。すると, グループ1(小説読者・趣味選択)は243名(38.7%), グループ2(小説読者・趣味非選択)は271名(43.2%), グループ3(小説非読者・趣味非選択)は114名(18.2%)となった⁽⁴⁾。各グループの度数分布からわかることは, 小説の読者であるのに趣味でない⁽³⁾と答えているグループ2が全体の約40%を占め, 趣味自認ありのグループ1以上の厚みをもっているということである。

4-2 テイスト仮説の提出

こうした趣味自認があるグループ1と趣味自認がないグループ2の間の乖離はなぜ存在するのだろうか。両グループを詳しく比べたのが以下の表1である。これをみると小説を趣味だと答えるグループ1においては小説を「よく読む」と答えたものがおよそ半数にのぼるので、小説を読むことが趣味と自認されるかどうかには読書量が非常に強い意味をもつだろうと推測される。小説を読むことが趣味ならばその人は小説をよく読んでいだろうという推論は常識的にも納得がいくものである。だが、ここで注目したいのは小説を「よく読む」にもかかわらずそれが趣味ではないと回答したものが20名も存在することである。

表1 趣味自認と読書頻度

	よく読む	ときどき読む	あまり読まない	ほとんど読まない	合計
グループ1	121	116	5	1	243
%	49.8%	47.7%	2.1%	0.4%	
グループ2	20	96	69	86	271
%	7.4%	35.4%	25.5%	31.7%	
	141	212	74	87	514
	27.4%	41.2%	14.4%	16.9%	

こうした回答の意味を理解するために、質問紙を用いたインタビューから、そもそも趣味についての質問Q1がどのような質問として理解可能なのかを検討したい。このような手続き自体は特に特殊なものではない。ポール・ラザーズフェルドは質問紙で採用すべき質問の内容、そこで用いられるワーディングの適切性をより良いものとするために、質問紙調査を行う前のインタビュー調査から「理由分析」を行っている(Lazarzfeld 1972=1984, Zeisel 1985=2005)。また、質問紙調査を郵送法ではなくサーヴェイインタビューで行うことの多いアメリカでは、サーヴェイインタビューを対象としたエスノメソドロジー・会話分析的研究から質問設計者の意図に合った回答が引きだされる際の会話の方法の解明およびその知見にもとづくインタビューの方針についての提言がなされてきた(Suchman & Jordan 1990)。本稿においても趣味の有無に関する質問Q1への回答が示す意味を明確にするため、質問紙を用いて行われたインタビューデータを用い、その中である回答者がみせた「趣味」についての概念的区別を参考とする⁽⁵⁾。

趣味に関する質問、「あなたはどのような趣味をおもちですか」を読み上げた際、

ある回答者は「ほんとに、ちゃんと言えるような趣味がなくて、人に胸張って言えるような趣味がなくて」という前置きをした上で回答を開始し、「好きなことは」と続けて、趣味を「好きなこと」に言い換えて回答を行っていた。この前置きと趣味を好きなものへと言い換えることは、「趣味をもつ」ことについての重要な概念的特徴を示している。

まず「ちゃんと言えるような趣味」がないことを前置きすることからわかることとして、ある活動や文化消費を自分の「趣味である」と回答する際、そこにはただその活動をした経験があることや文化消費の習慣がある以上の資格が必要であるものとして回答者が「趣味」を理解しているということがある。次に「趣味」を「好きなこと」に言い換えて回答することからわかるのは、趣味と答えるための資格には多様性があるということだ。つまり、何かを「趣味」だと述べる際に他者との比較を前提として「人に胸張って言える」ようなある種の敷居が求められることもあれば、単に「好きなこと」であれば十分なこともあるということである。当然、用いることのできる資格の種類はそれぞれの文化消費の歴史やあり方に深く規定されているだろう。

以上のことを踏まえて、小説を「よく読む」と答えているにもかかわらず、それが「趣味でない」と答える理由について考えてみよう。その理由として、ブルデューならば冒頭にあげたような恥ずべき読書というものをあげるだろう。つまり、小説を読んでいるにもかかわらず、自分が読む小説が読むに値しないものである、とテイストの貧しさに引け目を感じそれを趣味とはみなさないということである。これをテイスト仮説とよぼう。だが、北田(2011)の指摘や日本における小説の序列化の不透明性を鑑みるならば、こうしたブルデューの議論をそのまま受け取るのは難しい。本稿ではブルデューのこのような序列化されたテイストという概念が有効であることを前提とするのではなく、その有効性を検証する。

若者文化調査データは「ケータイ小説」や「ライトノベル」「古典的な小説」のそれぞれについて読書頻度をたずねているので、これを利用することでテイスト仮説を検証することができるだろう。若者文化調査は2010年に行われているのだが、2節で確認したように2000年代において「ケータイ小説」や「ライトノベル」というカテゴリーは「劣った」小説とみなされうる立場にあった。それゆえ、もしブルデューのこのようなテイストの序列化というものが機能しているのであれば、そうした小説を読んでいるものたちが自らの読書を恥ずべき読書だと感じ、小説を読むことを趣味と呼ぶ資格がない、と考えることがありうるだろう。

う。また、ブルデューが正しければ「古典的な小説」を読むものたちは自らの読書を胸を張って趣味だと自認するだろう。これに対して、もしブルデューの前提が妥当でなければ、こうした小説カテゴリーは趣味自認になんの影響も与えないだろう。

整理しよう。もしブルデューが正しければ読書量をコントロールした後も「ライトノベル」「ケータイ小説」「古典的な小説」といった小説を読むかどうかに興味自認にたいして効果をもつだろう。そして先行研究からは「古典的な小説」を読むことは趣味自認に正の効果を、「ライトノベル」や「ケータイ小説」を読むことは負の効果をもつと予想される。一方で、北田(2011)が指摘したようにテイストにもとづく序列化というのはすべての文化消費に当てはまるとは限らない。もし、分析の結果どのカテゴリーからも趣味自認にたいする効果を確認できなければ、ブルデューの議論において前提とされていたテイストによる序列というのは日本の小説においては妥当しないということが確かめられるだろう。

5. 分 析

5-1 データの概観

テイスト仮説の妥当性を検討するために本稿では小説読書の趣味自認を従属変数としたロジスティック回帰分析を行う。まず、分析で使用する変数を概観する。

表2 分析データの基本統計量

		%	N
趣味自認	趣味自認あり	47.7	203
	趣味自認なし	52.3	223
階層	上	7.5	32
	中の上	41.3	176
	中の中	37.6	160
	中の下	9.9	42
	下	3.8	16
年齢	19歳	2.1	9
	20歳	29.8	127
	21歳	38.7	165
	22歳	29.3	125
性別	女性	59.4	253
	男性	40.6	173

大学生ダミー	大学生	85.4	364
	非大学生	14.6	62
一般読書量	よく読む	27.7	118
	ときどき読む	40.8	174
	あまり読まない	14.3	61
	ほとんど読まない	17.1	73
ライトノベルダミー	読む	78.6	335
	読まない	21.4	91
ケータイ小説ダミー	読む	34.3	146
	読まない	65.7	280
古典的小説ダミー	読む	76.8	327
	読まない	23.2	99
趣味数 (N=426)	平均	標準偏差	中央値
	6.8	3.0	6.0

趣味自認変数は「小説の読書」を趣味として選択するかどうかをもとに作成した。階層は実家の暮らし向きを5カテゴリーから回答してもらった。大学生ダミー変数は職業が学生と答えたものから最終学歴が大学ないし大学院のものを「大学生」としてコード化した。趣味数は小説の読書を除いた趣味選択肢のなかから○をつけた数を足し合わせて作成した。「その他」の中に複数の回答を記入したのも一つとしてカウントし、「趣味はない」とだけ答えた場合は0として扱っている。一般読書量は「小説(ライトノベル、ケータイ小説などのすべてのジャンル(種類)を含む)」をどの程度読むかという質問に「よく読む」「ときどき読む」「あまり読まない」「ほとんど読まない」の4つのカテゴリーから答えたものを用いた。カテゴリー別読書ダミー変数は「ライトノベル」「ケータイ小説」「古典的な小説」のそれぞれに対して「よく読む」「ときどき読む」「あまり読まない」「ほとんど読まない」を「読む」とし、「まったく読まない」という回答を「読まない」として作成した。性別は男女を、年齢はそのまま用いた。使用する変数のうちひとつでも欠損値がある者は分析から除外した。各変数の記述統計は表2に示した。

本稿が目にする変数についてのみ記述統計を確認しておく。ライトノベル、ケータイ小説、古典的な小説の読書率は、ライトノベルについては78.6%、ケータイ小説については34.3%、古典小説については76.8%が読むと回答している。また一般読書量は「よく読む」が27.7%、「ときどき読む」が40.8%、「あまり読まない」が14.3%、「ほとんど読まない」が17.1%となっている。

5-2 モデルの説明と分析結果

ブルデュウ的テイスト仮説の妥当性を検証するために、ここでは趣味自認を従属変数としたロジスティック回帰分析を行う。争点となるのはそれぞれの特定の小説カテゴリーを読むかどうか、趣味自認にたいしてもつ効果が一般読書量をコントロールした後も存在するかどうか、もし存在するとしたらそれはどのようなものである。

表3 ロジスティック回帰分析結果

		モデル1		モデル2	
		係数值	SE	係数值	SE
階層	参照カテゴリー = 下				
	上	-1.642*	.921	-1.398	-.998
	中の上	-.922	.825	-1.024	.917
	中の中	-1.196	.823	-1.274	.914
	中の下	-1.172	.897	-1.060	.986
年齢		.003	.157	-.068	.163
女性ダミー		.104	.272	.348	.293
大学生ダミー		.147	.371	-.033	.394
趣味数		-1.144***	.046	.159***	.048
定数		-4.488	3.578	-3.137	3.720
一般読書量	参照カテゴリー =				
	ほとんど読まない				
	よく読む	6.233***	1.050	6.401***	1.065
	ときどき読む	4.520***	1.024	4.633***	1.033
	あまり読まない	1.844*	1.116	2.008*	1.124
ラノベ読者ダミー				-.543	.356
ケータイ読者ダミー				-.910***	.297
古典読者ダミー				.885**	.352
Observations		426		426	
Correct Classification		76.1%		79.1%	
AIC		387.5		373.0	
BIC		436.2		433.8	

*** p<0.01, ** p<0.05, * p<0.1

まず小説の読書の趣味自認を従属変数とし、一般読書量を独立変数とし、さらに統制変数として階層、年齢、性別、大学生ダミー、趣味数を投入したものをモ

デル1とする。次に、このモデル1に「ライトノベル」「ケータイ小説」「古典的な小説」の 카테고리別読書ダミーを投入したものをモデル2とする。この結果が表3になる。

モデル1の結果をみると一般読書量が強い正の効果を持っていることがわかる。ライトノベル、ケータイ小説、古典的な小説というカテゴリごとの読書の有無を投入したモデル2でも正の効果は変わらず一貫している。またモデル2からケータイ小説の読書が負の効果をもつこと、古典的な小説の読書が正の効果をもつことが確認できる。ライトノベルの読書は係数が負であるものの、この結果は10%水準でも統計的に有意ではない。

それぞれの変数の効果の大きさをわかりやすく示すためにモデル2に基づいて、小説を読んでいるものが小説読書を趣味と自認する確率を計算する。まず基準となる確率はすべての変数を中央値に設定したものとす。具体的には以下のように値を設定する。一般読書量は「ときどき読む」、ライトノベル読者はYes、ケータイ小説読者はNo、古典的小説読者はYes、階層は中の中、年齢は21、女性はYes、大学生はYes、趣味数は6。この基準となる形では小説を読むものが小説読書を趣味と自認する確率は0.602となる。この基本形をパターン0とし、個々の値を変化させることで「ライトノベル」「ケータイ小説」「古典的な小説」の 카테고리別読書ダミーの大きさを示したのが以下の表4である。パターン0からケータイ小説だけを「読む」になるパターン1では確率は0.602から0.379と大きく下降する。同様にパターン0から古典小説だけを「読まない」になるパターン2では0.623から0.385とこれも大幅に下降する。このことから古典的小説読書ダミーの正の効果の大きさと、ケータイ小説読者ダミーの負の効果の大きさがわかる。またパターン0からライトノベルだけを「読まない」ようになるパターン4では0.623から0.723へと微増する。

表4 全8パターンの確率

読者 \ パターン	0	1	2	3	4	5	6	7
ラノベ読者	○	○	○	○	×	×	×	×
ケータイ読者	×	○	×	○	×	×	○	○
古典読者	○	○	×	×	○	×	○	×
確率	0.602	0.379	0.385	0.201	0.723	0.518	0.512	0.302

5-3 分析まとめ

本稿は小説の読者たちが小説を読むことを趣味とみなすかという趣味自認に対して、読者たちが自らのテイストの良し悪しを考慮に入れるというテイスト仮説の妥当性を検証した。具体的には一般読書量をコントロールした後もカテゴリー別読書ダミーが効果を持つかどうか注目した。もし、こうしたカテゴリー別読書ダミーと趣味自認の間に関連がみられずにテイスト仮説が棄却されるならば、ブルデューのようなテイストの序列化なる前提は日本の小説読者にとって有効ではないことが示せたことになる。一方で、カテゴリー別読書ダミーが効果をもつならば、ブルデューのようなテイストの序列化が日本の小説読者たちにとって一定程度機能していることを示すことができ、それぞれのカテゴリーの効果を検討することでテイストの序列化がどのように機能しているのかを示すことができる。

分析結果からは、一般読書量をコントロールした後もケータイ小説には負の効果が、古典の読書には正の効果が確認できた。どのような小説を読むかと趣味自認の間に関係がなければこうした結果はえられないはずなので、どのような小説を読むかは趣味自認に関与的 (relevant) であり、テイストの良し悪しが文化消費において重要な資源であるというブルデューの議論の前提が日本の小説読書においても経験的に基本的に妥当であることが示された。また、ケータイ小説と古典的な小説については想定通りの結果がえられたが、ライトノベルについては係数は負であるものの統計的に有意ではなかった。このことのもつ意味については、もはや若年層においてはライトノベルが一般化し逸脱的なジャンルではなくなっている可能性が考えられるが、今回の分析ではそこまで判断することはできない。

以上のことをまとめると、データからテイストは小説の一般的読書量と並んで小説読書を趣味と見なすかどうかの重要な資源となっていることがわかった。そして「古典的な小説」はテイストの良いものとして、「ケータイ小説」はテイストの悪いものとして読者自身にも認識されていることがわかった。

6. 結 論

冒頭に引用したシャルチエとの対談の中でブルデューは誇るべき読書と恥ずべき読書とについて論じていた。そこでは読むべき立派な本を実際に読む読者と、読むべきでない低俗な本を恥ずかしさを覚えながらも読んでしまう読者という2

種類の読者がいることになる。こうした2種類の読者像の前提になっているのはテイストによる序列化であった。どちらの読者であれ「読むべき本」と「読むべきでない本」の差異に極めて敏感であり、自分たちが何を読んでいるのかによってどのように序列づけられるかを知っているのだ。

だが、リーベスや思想の科学グループを「読者」たちの研究へとかりたてたのは、文芸批評家たちが無視してしまうような「低俗な」小説を熱心に読む読者たちの姿であった。そして文芸評論家でさえもが「文学のサブカルチャー化」や「文学の終わり」を宣言する現代の日本においては、「テイストによる序列化」というものがはや明性をもたない状況であった。ブルデューが論じた「テイストによる序列化」なるものは、日本の小説読者たちにとって意味なものか、それとも北田が懸念したようにそれは研究者がつくりだした「過剰に差異化された人間」にすぎないのか。このような問題意識のもと、本稿が目指したのは読者たちにとってテイストとは何か経験的に答えることであった。

本稿はアンケートデータの分析を通して、テイストによる序列化が現在でも読者たちによって行われていることを明らかにした。具体的には小説読者たちの間で古典的な小説が優れたものとし、ケータイ小説が劣ったものとして小説の趣味自認の際に参照されることを示した。批評家によってなされる文学の特権性なるものの失効宣言にもかかわらず、都市部で生活する若年層においてさえテイストによる序列化が存在するというずれの存在を示した点で本稿の結果は読者研究にとって重要な知見となるだろう。同時に、「逸脱的」ととらえられることもあるライトノベルが小説を読むものたちの間での趣味自認において重要視されているとは言えず、必ずしも逸脱的なものとしては受け入れられていない可能性を示した。これらが小説についての読者研究に対する本稿の貢献である。

メディア研究、受け手研究への貢献としては本稿の調査法に対する工夫があげられる。本稿の問いはそもそもテイストの差異に基づいて序列化を行い、自らや他者を分類するというブルデューの議論の前提を経験的に問い直すことを目指していた。この目的を果たすためには、小説への強い愛をもつがゆえに微細な差異の中に意味をよみこむ熱心な読者たちだけを調査対象とするのではないアプローチが必要になる。本稿は年齢や居住地について限定があるものの、調査対象者の選別に関して小説に対しての読書量、知識量などを一切問わない形で実行されているアンケートデータを用いることでこうした前提を問い直すことを可能にした。またデータの分析においては趣味自認と文化消費活動とのずれに着目し、その差

異からひとびとの意味世界を探究するという新しいアプローチを提案した。

本稿の文化社会学意義としては、テイストという対象についての経験的研究の領域を切り開いたことがあげられる。本稿によってえられた結果はテイストについての一般理論を書き換えるようなものではない。だがそのことは本稿の弱みだとは考えない。なぜなら本稿の基本的な主張は、テイストの一般理論を構築するのではない形でテイストの社会学が可能であり、それはそれぞれの文化消費の場においてテイストが有意義な資源であるかどうかを記述することによって達成されるというものだからである。それはブルデューのテイストと階級についてのプロジェクトを再生させるのとは別の形でブルデューが文化研究に残した遺産を継承できることを示したということである。このような問題設定の転換は、テイストによる序列化という事態が自明ではないポピュラーカルチャーの研究とブルデューのテイストの議論を接続する上で重要である。

一方で、本稿はいくつかの限界を抱えている。まず、データとして使用した若者文化調査が年齢と地域についてきわめて限定的だという点があげられる。そのため結果を過大に一般化することには慎重でなければならない。理論的により重要なのは、趣味自認に影響を与える重要な変数として小説についての知識の深さが考えられることである。ブルデュー (Bourdieu 1979=1990) の利用した調査においては音楽について知ってる作品や作曲者を答えさせる質問が存在した。文学史が学校教育に含まれる小説においては知識量は重要な要因となりうる。また今回の分析でライトノベルが微妙な位置にあることが確認されたが、その意味について十分検討できなかつた。⁽⁶⁾これらは今後の研究の課題としたい。

注

- (1) ブルデューのテイストについての議論は、階層研究は階層の再生産を説明する新たな理論として文化的テイストを持ち出したものとして理解され大きな影響力をもった。この議論の経験妥当性については Goldthorpe (2007) による否定的な総括がある。
- (2) 北田の議論は工藤雅人によるファッションにおける差異化論についてのアイデアを参照している。このアイデアについてはその後論文化された工藤 (2014) を参照。
- (3) 回答の選択肢としては「4ほとんど読まない」というものも存在するが、わずかであれ読むことを含意する「4ほとんど読まない」と「5まったく読まない」との間には質的な差異があると考え「4ほとんど読まない」を「読む」、「まったく読まない」を「読まない」と分類した。こうした質的差異は実際に使われた調査票のデザインから回答者にとって見て取れるものであったと考えられる。調査票につい

ては北田(2013)の付録を参照。

- (4) Q1からQ11のどちらにでも無効回答が含まれるものについては分析から除外した。論理的には第四のグループとして小説の読書という文化消費を行っていないが、それを趣味として自認しているというグループを考慮することができる。だが、こうしたグループの実在を想定することは困難であり、データにおいても確認されなかった。
- (5) インタビュー調査は2011年2月11日と3月7日に練馬区にある喫茶店で行われた。調査対象はアンケート調査と同じ練馬区の男女が対象だが、年齢は18歳から20歳である。調査者の選定は条件に合う人を紹介してもらったかたちで行われた。
- (6) ケータイ小説とライトノベルの差異がなぜ生じているのかについて明確な回答を与えることは本稿の範囲を超えており、今後の研究にゆだねなければならない。その手がかりとして今回の調査における回答者の「オタク」自認の高さに注意を促しておきたい。ライトノベルへの否定的評価の原因の一つとしてアニメやマンガといったいわゆる「オタク」的文化とされるものとの親近性が指摘されてきた。だが「自分はオタクである」という質問について「そう思う」「ややそう思う」と答えたのは全回答者647名中286名と44.2%にのぼる(北田2013:139)。半数弱もの回答者がオタクを自認するという調査結果は、本研究が対象としたような都市部の若年層においては「オタク」的なものへの否定的意味づけがそもそもあまり成立していない可能性を示唆している。

引用・参考文献

- Bennett, T. (2011) "Culture, Choice, Necessity: A Political Critique of Bourdieu's Aesthetic," *Poetics*, 39(6) 530-46
- Bourdieu, P. (1979=1990) *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Paris: Minuit. (石井洋二郎訳『ディスタンクシオンⅠ』『ディスタンクシオンⅡ』藤原書店)
- Bourdieu, P. and Chartier, R. (1985=1992) "La Lecture: une pratique culturelle. Débat entre Pierre Bourdieu et Roger Chartier," in R. Chartier (ed.) *Pratiques de la lecture*, Paris: Rivages. (露崎俊平訳「読書——ひとつの文化的実践」『書物から読書へ』みすず書房)
- 江藤淳(1989)『全文芸時評下巻』新潮社
- Goldthorpe, J. (2007) "Cultural Capital": "Some Critical Observations," *Sociologica*, 2007(2) 1-23 (Retrieved 30 May, 2016, <http://www.sociologica.mulino.it/doi/10.2383/24755>).
- 速水健朗(2008)『ケータイ小説的。——“再ヤンキー化”時代の少女たち』原書房
- 柄谷行人(2005)『近代文学の終わり——柄谷行人の現在』インスクリプト
- 北田暁大(2011)「コミュニケーションにとって趣味とは何か①——2010年練馬区若者文化調査に基づく趣味概念の再検討」第84回日本社会学会大会報告原稿
- 北田暁大編(2013)『サブカルチャー資本と若者の社交性についての計量社会学的研究』平成21-23年度科学研究費補助金研究成果報告書(速報版), 東京大学(2014年11

- 月 15 日取得 : <https://sites.google.com/site/kaken21730402/home/distribution>).
- 工藤雅人 (2014) 「ファッションが『かぶらないようにする』ことの意味——2010 年練馬区在住 19~22 歳男女における服を着ることと他者意識の関係性」『ファッションビジネス学会論文誌』19 1-13
- Lazarzfeld, P. F. (1972=1984) *Qualitative Analysis: Historical and Critical Essays*. (西田春彦他訳『質的分析法』岩波書店)
- Leavis, Q. D. (1932) *Fiction and the Reading Public*, London: Chatto & Windus.
- 前田愛 (1993) 「読者論小史——国民文学論まで」『近代読者の成立』岩波書店
- 見田宗介 (1963=2012) 「ベストセラーの戦後日本史——社会心理史の時期区分」『定本 見田宗介著作集第 V 巻現代化日本の精神構造』岩波書店
- Thornton, S. (1995) *Club Cultures: Music, Media and Subcultural Capital*, Cambridge: Polity Press.
- Suchman, L. & B. Jordan (1990) "Interactional Troubles in Face-to-Face Survey Interviews," *Journal of the American Statistical Association*, 85(409) 232-253.
- 鶴見俊輔 (1950) 「日本の大衆小説」思想の科学研究会編『夢とおもかげ』中央公論社
- 山中智省 (2010) 『ライトノベルよどこへいく』青弓社
- Zeisel, H. (1985=2005) *Say it with Figures*, 6th ed., New York: HarperCollins. (佐藤郁也訳『数字で語る』新曜社)

付記

本稿は科学研究費助成「サブカルチャー資本と若者の社交性についての計量社会学的研究」(研究代表: 北田暁大, 研究課題番号 21730402) の成果の一部である。調査にご参加いただいた方に心から感謝する。本稿の役割分担は、統計分析を岡澤が単独で行い、ほかの部分岡澤・團が共同で行った。